

な現象で、直ぐに駄目になり、広大な荒地として放置されていたのを、県が眼を付け、原発立地として最適と判断し、東京電力に意向を打診した。

昭和 30 年代は 反原発 の動きも少なく、それよりも過疎化対策、地域振興の決め手となると歓迎されており、県知事の推薦、さらに自民党の長老である、元幹事長の斉藤邦吉代議士は地元（福島三区）選出、相馬市出身、自民党電源立地推進調査会会長のお墨付きとなれば、斉藤代議士の絶対的影響下にあった双葉郡、相馬郡としては町議会が誘致決議をするのも自然の流れだったのでしょう。

そして大熊町・双葉町にまたがる海岸地帯の約 350 万平方m（約 100 万坪）に及ぶ広大な敷地には更に 7・8 号基建設計画があったほどの広さがあった。

1971 年 3 月（昭和 46 年）東京電力にとって初の原発が稼動するまではいろいろあったが、もう一人原発推進の主役がおります。

当時の東電社長は木川田一隆氏、生まれが福島県伊達郡梁川町 父は医者、旧制角田中学（宮城県）旧制山形高校から、東京帝国大学経済学部卒業、当時の東京電灯会社入社、戦後は東京電力株式会社となり、やがて社長に就任、木川田天皇と言われるくらいの実力者で辣腕を振った。



原子力発電所建設が決まると、その建設地として浜通りを推奨し、当時の福島県知事 佐藤善一郎、（福島市出身）福島県議を経て、衆議院議員二期連続当選後、1957 年知事に当選、

この頃から木川田東電社長が福島県庁を訪れ、非公式な会談を重ねていたらしい。

ところが、佐藤知事は在任中の 1964 年、急性肝臓萎縮症で急死、その時点では未だ福島原発の調査も始まっていなかった。

（木川田東電社長）

次の知事は、木村守江氏、四倉町の開業医から 1950 年参議院議員に当選、1958 年衆議院議員に当選、1964 年佐藤知事急死による知事選で当選した。

木村氏は四倉町で代々の開業医（木村医院）、木川田社長も父、兄共に開業医で元々医者として親交があったらしい。そのような関係で原発問題は急進展した、といわれている。

確かに木川田社長は月に 1 回は福島へ出向いて知事と会談、地元町長や議会関係者と会談していたことは明らかになっている。

県トップの知事、地元選出で原発推進派の斉藤邦吉代議士、東電のトップが全て福島県人であり、地元町長、町議会も賛成となれば意志の疎通は完璧で、反原発の運動が疎らにあった程度ですんなりと決定した。

浜通りに集中したのは海の沿岸であることが条件で、原発は火力発電と同じ蒸気のパワーでタービン回して発電します。その水蒸気を冷やして水に戻して再び水蒸気になるよう加熱をするわけですが、水に戻す作業として復水器という装置にはパイプが張り巡らされていて、そのパイプには海から取水した水が通っています。

復水器を経た水はまた圧力容器に戻って循環しますが、水蒸気を冷却に使用された海水はパイプから放出され海に戻ります。

ですから海の沿岸に設置しなければならない理由がこれです。では外国では内陸に設置されているのはどうゆう理由だと反論されるかもしれませんが、アメリカ、ソ連、ヨーロッパでは、大きな河川があり、河川の岸に原発を建設すれば海と同じくらいに冷却水を確保できるからです。